
悪役上等！ 武装戦闘国家ゼクトール

アズマダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪役上等！ 武装戦闘国家ゼクトール

【Zコード】

Z0753Z

【作者名】

アズマダ

【あらすじ】

もしも、高校生が絶対君主制国家の国王になつたとしたら？
そして、国民における女の子率が、異様に高かつたとしたら？
さらに、国民の生与奪権が国王にあつたとしたら？
そのうえ、主人公を補佐するのが幼なじみの少女で、その子が暗躍しまくつたとしたら？
あまつさえ、その国が滅亡の危機に瀕していたとしたら？
その危機を救えるのは？
よーし、はじめていってみよう！

1・ニホン

序・

白い指だ。

細くてしなやかな少女の手が、白い砂に埋もれかけた写真を拾い上げた。

端が焼けこげた大判の写真。

細くて華奢な少女の手が、白い埃を丁寧に払いのける。
どこかぎこちない笑顔で収まる、十一人の集合写真。

中央に映っているのは、夏の制服を着た少年と少女だった。

1・ニホン

「ちょっと桃矢！」

怒りにまかせた幼馴染みの声と共に、A4サイズの雑誌を入れた紙袋が、桃矢の後頭部に直撃した。

芦原桃矢は、言い返したい言葉を飲み込んで、頭を抱えうずくまる。おさまりの悪い毛が一本、指の間から飛び出して左右に揺れていた。

「デートしてた女の子に対して、何も言わずに先に帰るつてどうよ？」それでも健全な高校生？ 十七歳男子？

雑誌を拾い上げ、砂埃を丁寧に払い落とした後、騎旗桃果は不平を口にした。

「テートって、……桃果ちゃん。学校の帰りに寄った本屋でフランカーの特集号を食い入るように立ち読みしてたのは誰ですか？ 口シア製新鋭戦闘機を穴が空くくらい眺めてるだけのテートなんて初めて聞いたよ」

アドレナリンが誘発した汗が、桃矢の額を濡らす。汗を拭う手が、意図的に長く伸ばした前髪をかき分ける。髪の隙間から大きなホク口が顔を出す。綺麗な五角を持つ星形の珍しいホク口だ。ホク口が空気に触れたことを察知した桃矢は、慌てて前髪を下ろす。

「お！ 桃矢の恥部を見るの久しぶりね！」

桃矢は、嫌そうな眼で桃果を見上げる。

夕方とはいえ、まだまだ力を保つたままの太陽。その陽光を背にした桃果は、光の中にいた。

夏の制服がよく似合う桃果。スカートのプリーツを透かして、形よい足が見える。

桃果は無邪気に笑っていた。

何物にも代えがたい輝きの笑み。このかわいい笑顔を見たいが為に、同年代の男共は身の程を超えた努力にいそしむのだ。

生まれたときからの付き合いを誇る桃矢でも、時々だまされたくなる太陽のような笑顔。

道行く十人が十人とも振り返るほど可愛いんだけど……中身を知つての桃矢は素直な反応をよこさなかつた。

「戦闘機の写真集だから痛かった？」

背中まで伸びたサラサラの黒髪を指すくい上げる桃果。

「まだ痛みの引かない頭頂部を片手で押さえている桃矢。

「写真は鉄の塊のを撮つたんだろうけど、媒体は紙だからね」

「じゃ、痛くないわね。さ、帰ろ帰ろ！」

話は済んだとばかりに、ズカズカと歩を進める桃果。

桃矢には、そのいい加減さに思い当たる節があった。

「桃果ちゃん。」
「両親さあ……」

「言わないで！」

先程までのおどけた空氣がない。桃果は、ぴしゃりと桃矢の言葉を封じた。

桃矢は肩をすくめてから歩き出す。桃果も、無かったことにして先を歩いていく。

毎日の毎回の繰り返し。いつの間にか、いつもの終わりが始まっている。

角を曲がれば桃矢の家。向かいは桃果の家。
角を曲がれば……。

「あれ？」
「なによ？」

曲がったとたん、桃矢が立ち止まる。芦原家の前に止まつた、黒塗りの大型車が一台。

車の周りには、ガツチリした体格かつ黒服の男達 ならぬ、グレーの制服が三人。

「軍服……のコスプレ？」

桃矢の頭の中をいろんなアニメ雑誌記事が、回り灯籠のようにゆっくり回転している。が、見覚えのないデザインだ。

灰色の男達の背後から、四つめの影が現れた。同じデザインの軍服を着ているが……。

線が細い。

桃矢と同じ年であろうと思われる、背筋を伸ばした美少女が、七分の構えで立つ。

後ろになでつけた短い金髪は絹のように細く、アイスブルーの目が底抜けに冷たい。
どのような混血の結果か？　きめの細かい浅黒い肌が、彼女の人生種を複雑にしていた。

「トーヤ・アシハラ様……ですね？」

「は、はい」

それを合図に、男の一人が車の後部ドアを開ける。と、同時にエンジンがかかる。

これはまずい。大変まずい展開だ。桃矢の脳裏に「拉致」の一言が浮かぶ。

「初めまして。わたくしミウラ・ヴァイツと申します」

肩パット入りの制服とタイトミニが、凛々しくも美しい。

「事は急ぎます。トーヤ様、我らとご同行願います」

両脇を灰色の男達にガツチリつかまれた。万力で腕をはさまれた感覚。もがいてみるが微動だにしない。

「ちょっと、あなた達誰よ？　ここは法治國家日本よ！　最近この近くで誘拐事件があつてね。この辺、警察のパトロールが頻繁なのがよ！」

桃矢と車の間に立ちふさがる桃果。こういう時に機転の利く、頭の回転が速い子だ。彼女を頼もしく思う時点で、男失格だなと思う桃矢。

厳つい男が、丸太のよつに太い腕を伸ばし、桃果をよつこりせと脇へ退かす。

ミウラと名乗る少女は、微笑みもしなかつた。

桃矢は、鏡で自分の顔を見たくなつた。我ながら情けない顔をしているだろうと思う。

「だめよ！ 桃矢はこれからあたしと百里へ、イーグル見に行くのよ！ 先約よ！」

「そんな約束してないつて！ 僕は軍事オタじやないから」

桃矢とミウラの両方から無視される桃果。だが、負けない。再び、前に回り込む。

「これを見なさい！ このひもを引き抜くと警報が鳴つて警察が大挙して押し寄せてくるわよ！ そくならないうちに桃矢を離しなさい！」

桃果が持つているのは白い携帯と、訳あって表現できないが、世界一有名なビーグル犬のストラップ。引き抜いたところでブザーは鳴らない。お子様携帯であるわけでなし、もとよりそんな機能はついていない。

ミウラはまじまじと桃果を見つめている。

「さあ、どうするの あ！」

桃果の携帯は、手首のスナップを利かせたミウラの猫パンチではたき落とされた。

「ああっ、ちよっと！」

嫌な音を立てて落下した携帯を拾い上げよつと、慌ててしゃがみ込む桃果。

「ああああ、ちよっと… ちよっと…」

一方、宙ぶらりんになつた桃矢。抵抗虚しく、コンパクトに車の

中の人となる。

と、窓の外に母の姿を見た。

「お母さん！ 助けて！」

車の中から大声で叫ぶ桃矢。

偶然か神の思し召しか。うまい具合に母と視線が合った。

「行つてらっしゃい。体に気をつけるのよ！」

笑顔で送り出す母。手を振っている。

店の奥から、父が姿を現した。

「父さーん！ 助けてー！」

ワインクしながらサムズアップする父。キラリと光る白い歯がとてもダンディ。

「どうこいつ」と一つ？

桃矢のいつもの日常は、あっけなく幕を閉じたのだった。

有無を言わぬ空港へ。国際線の大型ジェットに乗ること十数時間。

さらに、一回り小さいジェット旅客機に乗り換えて数時間。もう一度乗り換えた三十人乗りのプロペラ機が水平飛行に移った時、たまらず桃矢が口を開いた。

「あの！ 僕どうなつちゃうんでしょつか？」

対して、大きく目を見開くことで答えるミウラ。

「どうって……トーヤ様、なにがどうなのでしょうか？」

桃矢は理解した。話が噛み合つてないのを。

「何で僕が拉致されなきやならないんですか？」

ミウラは微かに口を開いて動かなくなつた。目の光も鈍くなつている。

桃矢が待つこと十数秒。状況を判断しあえたのか、ミウラの瞳に再び明かりが灯る。

「ひょっとしてトーヤ様、ご両親からは何も聞いておられないのでしょうか？」

自分のことを「様」付けで呼んでもらつていうところを鑑みるに、可及的速やかな危機はなさそうだ。と、なると、桃矢にも、ある種の感情が自然発生する。

ズバリ、その名は怒り。

「だから、何が何だか解らないから聞いてるんですつて！」

「アイヤウホイ！」

母国語であるうか？ 聞いたことのない単語を口走り、左手を額にあてるミウラ。なにか重大な齟齬をきたしたらしい。

ミウラは居住まいを正した。

「トーヤ様。数々の『無礼お許し下さい』。改めて全てをお話しいたします」

一旦言葉を句切り、ミウラは視線を前後左右に素早く走らせる。その仕種につられ、桃矢もキヨロキヨロとあたりを見渡した。

いつの間にか、灰色の大男がいなくなつている。その代わり、不自然な人が増えていた。

アロハシャツを着た人の良さそうな老人が、紙コップに入ったコ

ーヒーをすすつている。新聞を広げる背の高い婦人。居眠りする老婆。難しい顔をして窓を睨んでいる中年女性。

人種はバラバラだが、ミウラの軍服を気にしている人は一人もない。

これはつ、全て同じ穴のムジナつ？

「我らが母國の名はゼクトール。ゼクトール王國と申します」姿勢の良いミウラがさらに姿勢を正す。

桃矢は、初めてミウラを正面から見据えることになる。小さい顔。日本人離れした美しき風貌。……日本人ではないが。

威風堂々としたその態度、とても同年代には見えない。

桃矢はミウラの瞳の色、アイスブルーが、色に等しい温度をもつたように感じた。

「トーヤ様はゼクトールの次期国王なのです」

この間、きつちり三秒。

「はい？」

いまいち、よく聞き取れなかつた。

「トーヤ様は、ゼクトール民主主義國前国王ゼブダ・バルギトル・ゼクトール様の跡継ぎなのです」

「えーと、……いい病院紹介しましょつか？」

「言い直しましょう。前国王が身罷られた今、トーヤ様が次期国王に決ましたのです」

「なんですよーつ！」

前の席から身を乗り出して叫んだのは桃果であつた。

1・ニホン（後書き）

今回、そんなに深く考えていません(ｗ)
女の子も、百万人は出てきません(笑)
全40話程度の予定です。

2・ゼクトール

「な、なんで桃果ちゃんが？」

桃矢は自分の身の上話より、桃果が、今ここにいる事に強く疑問を感じている。

「るつさいわね！ そんなことよりあなた、ミウラー。続きを早く話しなさいよ！」

目を大きく見開いたまま、しばし動搖を隠せないミウラ。その間のミウラは年相応の顔をしていた。ついでに言つと、周囲の一般人らしき人々も中腰になっていた。

ミウラは、桃果の気迫に押されるようにして話を続ける。

「ゼクトールの前国王には、お子様がございませんでした。つまり、息を引き取られた時点で、王家の直系が絶えてしまったのです。傍流のお血筋で、王位継承にもっともふさわしい条件をそろえておいでなのがトーヤ様なのです」

桃矢の感覚は麻痺していた。理不尽な出来事に続いて、極度の緊張を持続させたためか、情報の入り口が狭くなっていたのだ。

桃果の手が伸びたのに気付かない。そつと伸びた桃果の小さい手が桃矢の額をさわる。そして、桃矢の伸びた前髪をかき上げた。

「これね？ この星形のウルトラビームね？」

「いや、あのね桃果ちゃん」

「こういう我に返りかたは嫌いだつた。

「それです。ゼクトール王家の血を濃くひく方々に、たまに現れる遺伝上の特徴です。星形のお印を持つ方が、最も初代に近いと言わっています」

桃矢の「デリカシー」など問題外の事らしい。

「でもさ、僕は日本人顔だよ。両親も日本人だし、両方のお爺さんお婆さんも日本人だよ」

桃矢の手を乱暴に払い、前髪を元に戻す桃矢。

「第一次世界大戦末期、我が祖国ゼクトールへ侵攻した日本軍が、両国親善のためと称し、王家の姫君、キリア・ウハウハ・ゼクトーラ様を日本へ連れ去られた。その姫様がトーヤ様の曾お婆さままでござります」

「さすがに三代前は聞いてないな。……つーか、そんな話が本当にあつたらマスコミが喜んで大騒ぎしてるよ！」

笑顔を浮かべようとしたりが、頬が引きつっただけだった。

「その部隊が目的不明の秘匿部隊であったこと。部隊が撤退中に、連合国軍の攻撃で壊滅的打撃を受けたこと。生き残りが姫様を託した輸送部隊に、トーヤ様の曾お爺さまがおられたこと。そのあと、生き残りの方々が、姫君を落ち延びさせるため特攻攻撃を掛け、全滅したこと。等々、いろんな事が重なり、表に出ない史実として闇に埋もれていたのです」

一般人を装う乗客達は、普通の乗客に戻っていた。ただ皆、一様に沈痛な面持ちであった。その事が、マシーンになりきれない彼らの国民性を物語っているのかもしれない。

「隔世遺伝ってヤツ？」

桃矢の問いに、うなずくミウラ。ミウラの瞳は力強い光に満ちていた。しかし、今までとは違った光。強い忠誠心に満ちあふれた従順な家臣のもの。

「ふつ！ 仕方ないわね」

まったく、桃果は空気を読まない子だ。桃矢はいらだちを覚える。恐れ以外の感情が桃矢に現れた。それは周りを見つめる余裕ができた証拠なのだが、彼は気付かない。

「わたしが桃矢王朝の為に一肌脱いでやるうじやないの。で、どこよ？ ゼクトールとかいう国の場所は？」

腕を組んで鼻から荒い息を吐く桃果。口をあんぐりと開ける桃矢。

桃果はこの状況を受け入れている？ なにゆえ？

「えーと、桃果様でしたわね？」

元の冷たいアイスブルーに戻ったミウラ。警戒心を露わにした言葉は冷氣を帯びている。

「桃果様は、早々にお帰り願います。『近所の幼馴染みというだけでは、おつきあい願えません。第一、』両親が心配なされているでしょう。お電話でもなさいますか？」

「『りともしない』ミウラ。『つい携帯を桃果に渡す。恐らく軍用と思われる。

「大丈夫！ そんな必要ないわ！」

腕を組み、傲然と笑っている桃果。頭が天井へ付きそうになつてみるとこころを見ると、座席の上に立つていてるのだらう。

「だ、だめです、それでは理由になりませんー、』両親と、よく話し合つてくださいー」

眉間に皺を寄せ、困った顔をするミウラ。何にこだわつていてるのか。

「いいのよ、あんな連中！」「

「家族は大事にしなければなりません！」

桃果の言葉にミウラが即反応した。反応の早さに桃矢が驚いた。
ミウラの絡みようは、道徳心だけから来るものとは思えない。酷く真剣な眼差しだ。

「あたしに家族はないの！　あたしの両親は離婚したの！」
ミウラの動きが止まった。

新聞を読んでる人も、コーヒーをすすってる人も、動作を止めて
いる。

機内の空気が堅くなつた。

「タベ離婚届に判子を押したわ。あたしが立会人よ！」
「やつぱりだめだったの？」

家は隣同士、高校は一緒。桃矢は、ある程度の成り行きを知つて
いる。お人好しの桃矢は、自分の身に降りかかる不幸を脇に置き、
桃果の今後を心配している。

「お父さんもお母さんも、家や家族を守るつもりなんて、最初から
これっぽちも無かつたって事よね。やつと家族が終わつたつて。そ
んなこと言つてた」

いつものような、明るい笑顔を見せている桃果。

桃矢の目には無理をしている様に映る。こんな場合、どう声をか
けてやればいいのか？

「親御さんは子供のことを、あなたを必ず愛しているはずです！
だから、諦めずにもう一度お話しすべきです！」

言葉を紡いだのはミウラだった。

クールビューティは眉を寄せていた。なにゆえか、ミウラは桃果
の家庭を心配していた。

「親を好きにさせてやるのも子供の愛情よ！」

指を一本立て、チチチと左右に振る桃果。

「しかし」

家族にこだわるミウラを桃果が遮る。

「あたしは、絶対に家族を守りきる大人になるわ！ 死ぬまで家族を終わりにしない！」

太平洋高気圧のような凄みのある笑み。桃矢の目には、それが痛々しく映つた。

「ところでミウラさん？」

桃果は座席から、いきおいよく飛び降りた。

「あたしは騎旗桃果。彼は芦原桃矢。一人とも名前に桃が付いている。なぜだかわかる？」

桃果は話の方向を意図的に反らしている。ミウラのアイスブルーに興味の色が浮かんだ。

なぜだか？ と言われても説明に困る。大それた理由などないからだ。じつは、先に生まれた桃果の「桃」の字を氣に入つた桃矢の母が、こじつけで付けた名前だったのだ。

「我が騎旗家は明治の御維新からこっち、ずっと芦原家嫡男の護衛を務める家柄なの！」

いや、いやいやいや。芦原家が先祖伝来住まいしていた土地に二十年前、騎旗家が越してきたのだし、次男の桃矢は嫡男じゃない。兄が一人いるし。

そんな関係は成立しない。

「十七年前に星形のホクロを額にもつて生まれた男の子。偶然同じ年に生まれたあたしと桃矢は等しく育ち、等しく教育を受けてきた。それはね、桃矢の考え方を理解し、力添えをする為よ。いわば、あ

なた達とあたしは同志なのよー。」

二人は同じ年だし、同じ高校に通つて同じ教科書を持つてゐる。
桃果の言葉に嘘はない。嘘は言ってないけど、本当のことも言って
ないパターン。

さすがに桃果を見てられなくなつた桃矢。ミウラの顔色をつかが
つた。

彼女は田を見開き聞き入つていた。意外と素直な少女である。

いやいやいや、腐つても軍人……腐るほども年取つてなさそうだ
が……、そんなフェイク、ミウラが信じるわけないだろ？
「どうかご協力お願ひします」

頭を下げるミウラ。白く固まる桃矢。

「任せなさい！」

ますます鼻息が荒くなる桃果。そこそこに豊かな胸を反らしてい
るのでだった。

2・ゼクール（後書き）

さてさて、話が走り出しました。

ついでにボチッと評価ボタンを押してください。

3・「バルトの海

「ところで、ゼクトールって王制を敷いているところから見て絶対君主主義国家？ ねえ、軍事国家でしょ？ 戦闘機は何を採用してるので？ ミラージュ？ それともF？」

たたみ掛けた桃果に押され氣味のミウラ。

「えーと、ミグ」

「あーそっち系ね、はいはい！ 小さい国特有ね。いいわよいわよ、あたし向きよ！」

桃矢は、あきらめ顔で飛行機の天井を見上げた。

やれやれ、どこでも桃果ちゃんは桃果ちゃんなわけで……、でも桃果ちゃんのおかげで気持ちが軽くなつた。

冷静に考えると桃矢の立場は低くない。余裕じゃん！

そこまで考えが及ぶと、俄然、桃矢の中に怒りが込み上りってきた。

「僕は国王を引き受けるなんて言つてないよ！ 第一、僕の親が黙つてない！ 今頃警察沙汰になつてるよ。へたすりや国際問題だ！」
大声を出す桃矢。対して、らしくない顔をするミウラ。彼女に対するスマートなイメージがどんどん崩れていく。……これ見よがしな桃果の舌打ちは、聞かないフリをする。

「ご両親からは許可をいただいてますが？ 当然、理由はご存じでしたし」

「あれ？」

「ちょっと、…………」いつ……期待していた答えと違う。

「僕に電話貸して！」

母から帰ってきた答えはこうだ。

『あれ、言つてなかつたつけ？　でも、ミウラさんつていい人でしょ？　かわいいし』

「父さんに代わつて！」

『父さんだ。思つたより早かつたけど、まあいい。男はいつか旅立つものと相場は決まつていて。盆と正月には帰つてこによ』

桃矢は電話を静かに置いた。世にも情けない顔をして振り返る。

「もちろん日本政府にも、外交的に話がついています」

ミウラがどどめを刺した。

もうだめだ！　膝を抱えて、床につづくまる桃矢。

「可哀想に」

優しく桃矢の頭を撫でる桃果。目にいっぱいの涙を浮かべて桃果を見上げる桃矢。

……桃果は嬉しそうに笑つていた。

「トーヤ様、どうかご安心を。トーヤ様が思つておられるよつな責務を我らは求めておりません」

初めて柔らかい笑みを浮かべるミウラ。

「は？　はあ？」

「ええーっ！」

腑抜けた声を出す桃矢と、あからさまに残念そつな声を上げる桃果。

「いわば素人のトーヤ様に、今までの生活を捨てて王になれと申し上げるのも、それは無理な話。我らとて重々承知しております。これはあくまで形式的なものです」

まずは桃矢を安心させるため、結果を先に言つ//ウラ。

「ゼクトールは今、問題を抱え込んでおります。といつても、トーヤ様がお気にかけられる類の問題ではありません。政治形態に王制を探るゼクトールといたしましては、政府首脳部が案件を解決するにあたり、仮初めとはいえ国王が必要なのです」

//ウラは、一息ついて桃矢達の様子を見た。ツバメの雛のよう口を開けている桃矢と桃果。上々な結果である。

「トーヤ様におかれましては、ゼクトール政府の機能回復のため、いくつかの案件の承認と権限委譲に同意していただくだけで結構です。それもたつた一日間。ご迷惑はおかげいたしません。合間に、郷土料理や名所観光などでお楽しみいただければよろしいかと」
固い笑みをきこりなく浮かべる//ウラ。

「いわば、機内移動時間無視のゼクトール国王体験一泊一日の旅をご満喫！ つて解釈で良いのかしら？」

//ウラの説明に納得いったのか、桃果が合いの手を入れる。

「はい、正にその通りでございます！」

今度こそ、心底につこりと微笑む//ウラ。年相応の笑顔。とても可愛かった。

しかし 。

「冗談じゃない！ そんな一方的で理不尽なナード付き合ひほど僕は暇じやなキユー！」

「キユ？」

細い眉を寄せせる//ウラ。

そこには、後ろから桃矢の首に腕を絡ませた桃果がいた。
立つたままのネックブリーカー。容赦ない事で有名な技だ。

「で、ゼクトールって何処にあるの？ 教えてちょうだい」

桃矢のことはさておき、氣さくに話しかける桃果。

ミウラは桃矢と桃果の眼前で紙を広げた。それは世界地図だった。落ち込んでいても始まらない。桃矢は、逃げ出すための情報収集のつもりで覗き込む。

「ここです」

ミウラが指示する場所は、赤道からちょっとだけ離れた海の真ん中にある、針で突いた傷のような小さい島。

「えつ！ ええーっ！ 島国？」

頭を抱えたのは桃矢。ありとあらゆる大陸や半島や島から離れるだけ離れている。まさに絶海の孤島。陸、海、空路での単独脱出は不可能。

「拡大図はこいつ」

ミウラがもう一枚の地図を広げる。

ほぼ円形の島から西に一本、岬が張り出している。一言で表現するならフライパン。

それと柄の延長線上に小さな島が一つ。

「こいつ、これは……屋久島より小さい？」

桃果も会話に窮し、眉をひそめていた。

「でもさ、なんでこんなへんぴな……もとい。ちいさな国の姫様を

旧日本軍が？」

桃矢、当然の疑問である。

「眞の目的は計りかねますが、我が国で戦局に係わる何かを発見したらしく あつ！ 見えてきました。あれがゼクトールです！」

ミウラが、顔を輝かせながら窓の外を指さす。桃矢は、指された景色を見るついでにミウラの表情を盗み見た。故郷を見るミウラ。子供っぽい顔をしている。

「うわっ、ちょーすゞっ！ ヤバイくらい綺麗！」

桃果の歎声に、桃矢ものぞき込む。

コバルトブルーの中にエメラルドをちりばめた海。そこに浮かぶ
緑の島。

陽の中の陽、光の景色が広がっている。

「美しい！」

あまりにも現実離れした美しい景色がどこまでも続いていた。

結局、ゼクトール本国に降り立つたのは、拉致られてから一日以上経つてからだった。

3・「バルトの海（後書き）

お気に召したら、軽く評価ボタンを押してください。
軽く。

4・水着

底抜けに青い空。暖かいを通り越した、あきらかに熱帯性の気候。やんわりとした風に漂つてくるのは潮の匂い。

暑い。いや熱い。

ギラギラという擬音でしか表現できない、強力かつ容赦ない太陽光が恨めしい。緩やかな風が吹いてなかつたら、とても立つてなどいられない。

空港は立派だった。

旧日本軍が作ったという、大型旅客機も発着可能な滑走路が一本。一本だけ伸びていた。随分金がかかっているらしく、夜間発着も可能とのこと。後は小屋が一棟と、てっぺんに吹き流しを一本揚げた管制塔がそびえ立つているだけ。

移動時間と時差の加減もあるのか、ここゼクトールは、朝の早い時間帯だった。

「ビバ、南海の孤島」

桃矢の歓声は生ぬるかつた。『陽気な単語に反比例して、勢いがない。

一日程度の再会なのに、久しぶり感の地面。よく日に焼けたコンクリートの感触を通学靴の底に感じながら、桃矢は大地を踏みしめた。

目の前に広がるこの光景。桃矢は似たような光景を何度かテレビで見た記憶がある。

外国から要人を迎えるときの、あの光景。あの式典。出迎えの音楽隊が、ゼクトール国歌らしき、のんびりした調べを演奏している。

「常夏の一、国、ゼクトルル。南海いにい、浮かぶ島あー」桃果が即興で詩を乗っける。四拍子で構成された実に平和な国歌だ。とても桃果が主張するよつた戦闘国家には見えない。

が、なにか違和感を感じる。

「なに？ やつぱ暑いから？」
樂団員は、全員女の子。中学生くらいか？ まあ、それはそれでアリだろ？

問題としているのは服装だ。上半身は白いセーラー服。まあ、これはこれでアリだろ。
解せないのは下半身。スカートもズボンもはいてない。
全員ハイレグの白い水着。……と、白のブーツ。

この地方の風習なのかもしれない。なにせ暑いからね……周りは海だし。

桃矢は結論づけた。これは南国ゼクトールの風習だ！
ハワイの空港で出迎えてくれるお姉ちゃんは上半身ビキニの水着じゃないか。なら下半身水着の国だつてあるはず。ワンピースの水着つてのが健康的じゃないか！ いやあ、ゼクトールつてさすが南国だなあ！

……なわきやねえだろ！

桃果はどう受け取ったのだろうか？ 後ろを歩いてくるはずの桃果を振り向く。

目が……、桃果の目がわずかに細められていた。細めた猫の目に似た形。

だめだ！ 完全にゼクトールを気に入っている。

これは……桃果を置いて、一人脱出という選択肢も……あるいは。

そんな風に考えていたら、桃果が手を握ってきた。
色っぽい握り方ではない。あえて言うなら手錠的な握り方。
桃果の顔を覗き込んだ。逃げたらコロスと彼女の目が言つてる。

「ゼクトール王宮へ向かいます。この国の重鎮達が、首を長くしてトーヤ様をお待ちいたしております」

よぼよぼの爺様が運転する、オールドファッショソのリンカーンに押し込まれる桃矢達。

沿道には大勢の人が繰り出していた。手に手にゼクトール国旗と日の丸が握られ、ハゲシク振られている。熱烈な歓迎である。

桃果は嬉しそうに手を振り返していた。

「ほら、桃矢。ボサツとしてないで手を振つてあげなさい！」

氣乗りしない表情で手を振る桃矢。ボーとしていた桃矢だが、ふと気付いた。

道々で旗を振る人々。日本の夏とそう変わりない服装。桃矢と同世代の女の子が、黄色い歓声を上げている。一人や二人ではない。三桁に上る数だ。

桃矢の集中力が、ピーキーかつクイックレスポンスで上昇した。あらためてよく観察すると、グラマラスな大人のお姉さんも多数混じっておられた。

旗を振るたび、揺れるバスト。ワンアクションヒット、くねるヒップ。柔らかそうな太股。

……いや、健康的な意味で。

水着を着ている女の子はいないが、みな薄着である。暑いから当然だ。

俄然、男前の顔をする桃矢。手の振りも、きびきびとしたものに変わる。

……いや、健康的な意味で。

視線を感じて振り返ると、桃果のニヤニヤ笑いがあつた。
これはまずい！ このままでは、しめしがつかない。

「いや、ほり、別に国王になることを認めた訳じゃないからね。だつてこんなに歓迎されて、いい加減な態度できないでしょ？ いや、健康的な意味で！」

たまらず桃果が噴きだした。桃矢の沾券が回復するのは、遠い未来のようだ。

一分十五秒のドライブが終わり、運転手がブルブルした手でドアを開ける。

降り立つた先に構えているのは白亜の。

「ここがゼクトール王宮です」

「まあ、予想は付いていたんだよな」

ミウラが案内してくれたのは、築五十五年、木造二階建て。

白の剥げかけたペンキを基調とした外観に、いろいろと飾り的な装飾が施されている。

田舎の村役場より、よっぽど金のかかった建物だ。
ありていに言つて、桃矢が住んでいた土地の市役所より劣る。

「間を取つて町役場だな」

桃矢は、なにもバッキンガム宮殿やノイシユヴァンシュタイン城を想像していたわけではない。が、やや撫で肩姿勢で歩いていた。

「お城つてイメージじゃないわよね？」

桃果も、同じことを言いながらミウラの後について歩いていく。

「狭いながら、王宮には美術館や図書室、卓球場などが入つてあります。もちろん、各行政機関も全て収納しています」

「卓球場の意味が解りませんが、なるほど立派ですね」

「ありがとうござります。では、ゼクトール政府の重鎮達を紹介いたしましょう！」

王宮玄関先で桃矢達を出迎えたのは、水着姿の九人の女の子達。「えーと……」

言葉に詰まっているのは桃矢だけではない。桃果も黙り込んでいる。むしろ、声を出せただけまだましである。さすが男の子。

ゼクトールは混血が進んでいるのだろう。いろんな人種が混じっているようだ。

その中で、黒縁眼鏡をかけた、一番背の高いお姉さんが一步進み出た。

「わたくしはジョベル・オルブリヒト。日本では総理大臣に当たる宰相を勤めさせていただいております。トーヤ様は戴冠式を済ませておいでではありませんが、事は急を要します。トーヤ様のお立場は、これ以後、事実上の国王であらせられます」

明るいブラウンの髪を後ろに流した大人のお姉さん。透けるように肌が白い女人。背が高く胸が大きい。くびれたウエストに張りのある腰部。皿の置き場にやたら困る。

「よろしくお願いいたします、トーヤ様」

「あ、よろしく願いたします」

後頭部をガリガリ搔く桃矢。アガつているのは火を見るより明らか。

しかし、一国の首相にしては若すぎないか？ 若作りをしているよつには見えないが。

「失礼ですが、ジョベルさんはおいくつですか？」

堂々と女性に年を聞く桃矢。

「二十四才です」

「こやかに答えるジョベル。やはり若い。若すぎる。

これを機にしてゼクター政府重鎮達の血口紹介が始まった。

「国土交通委員長のエレカ・フリフラー。今年で十八才……です！」

シコートの黒髪と漆黒の瞳が白い肌に映える。

つぎの子は、無言で頭を下げただけだった。青白い髪がゆらりと揺れる。

「あ、この子は文部科学委員長のミラ・ロコモコ。十七才。ほんと無口で困るよね」

ミラの頭を平手ではたくエレカ。はたかれているのに、まったく無関心顔のミラだった。

「農務委員長を拝命しました、ノア・モフモフ、十三才です」
長く垂らした三つ編みが可愛い。身長も胸も小さいながら引き締
まつた体つき。

「ががが、外務委員長のサラ・プロプロ、十三才です。よよよ、よ
ろしくお願ひします」

おかっぱ頭で、接触感覚が柔らかそうなイメージの幼児体型。

以後、十八歳の商務委員長ジムル。十六歳の財務委員長マープル。
十五歳の法務委員長アマル、と続していく。

「口一口している桃矢だが、実のところ、内心、ものすごい疑念
が渦巻いている。

居並ぶ委員長達の共通点を桃矢は発見したのだ。多分、桃果も氣
付いているだろ？。しかしこれほど聞きにくいものはない。

「そして最後に、国防委員長を務めさせていただきます、ミウラ・
ヴァイツ。十七才です」

ミウラの挨拶がどめとなつた。桃矢は、たまらず疑問を口にし
た。

「ゼクトールの閣僚には、年齢や性別に制限があるのですか？」

九人の委員長達、すべてが女子。宰相のジェベルが最年長。でも
二十四才。

OLS一人。高校生が五人。中学生が三人。平均年齢、十六・八
才。

つか、日本の法律では、ジェベル以外全員未成年。

彼女たちが自分に仕えてくれる。嬉しい！ でも不安！

低い次元の狭間で揺れる桃矢であった。

4・水着（後書き）

次回、5・最終防衛ライン。
なにが最終防衛ラインなのかw

誤字脱字の指摘・感想お待ちしています。
僕力ノの感想もお待ちしてます！

5・最終防衛ライン

「疑問は『こもつとも』
艶然と笑うジエベル。意味無く『テヘヘ笑いを返す桃矢。桃矢に足
を踏まれた。

「ゼクトールは、主立つた産業のない小さな島国です。小島嶼開発
途上国として、国連に認定されています。政府財源は、国民の出稼
ぎによる送金に頼っている次第です」「

「だから、なんで若い子ばかりが……あ！」

あることに気がついた桃矢。そういえば、沿道で迎えてくれた國
民の皆様方。全て女性ではなかつたか？

「まさか？」

仮説が確信に変わる瞬間。

「まさか成人男子全員が、海外へ出稼ぎに出でている……とか？」

いいところを奪い去つたのは桃果。彼女の顔に張り付いた笑みが、
紙のように薄つペらい。

「その通りです。我がゼクトールでは、一家を支えるのは男の仕事。
そしてゼクトールには主立つた輸出産業がございません。ゆえに労
働可能な男子全員、家族を残して諸外国へ出稼ぎに出向いています。
ゼクトール人は実直勤勉、そして忠実な国民性で有名なので、引く
手あまた。最近は主に中東方面での雇用が増えています」

ジエベルは肯定した。

他の委員長達も頷いている。彼女たちの父や兄は、遠い異国で身
を粉にして働いているのだ。そして、年老いた祖父母のため、ある
者は妻や子供達のために、またあるものは母や妹たちに、稼ぎのほ

とんどを送つてゐるといづ。

「立派ね！　あたしの両親なんか、恥ずかしくて語れないわね。家族のために歯を食いしばる。美しいわ！」

自分の世界に入り込む桃果。遠い一点を見つめている。

「まあ……、ここよりは美味しいものや面白いものがあるので、それほど歯は食いしばつていないうですが」

「美しいわ！」

現実から目をそらし、オリジナルストーリーを完成させる桃果であつた。

「そしてもう一つ。ゼクトールの政治的慣習が関係します」
ジエベルの次の言葉を目で促す桃矢。

「ゼクトールの政治体系は、絶対君主制。王の権限は絶大です。よつて、ゼクトールにおける閻僚とは、王の指示の元、各部門での実行機関にすぎません。つまり委員会。そして、国王が亡くなつた場合、政治家と呼ばれる者達は、一斉に引退します」

大昔、日本や中国では、大王が死ぬと側近の者や使用人が殉職させられる。そんな話を思い出した桃矢。あれは大昔の風習。

ジエベルは言葉を句切つたまま、桃矢と桃果を交互に見ている。
二人の理解度を測つてゐるようだ。

「一人ともここまで付いてきていると判断したのだろう。ジエベルは、話を続けた。

「貴族と名乗るのはおこがましいですが、私たちは家ごとに各委員会を受け持つています。そして代々、長の地位を受け継いでいるのです。たとえば、我がオルブリヒト家が全委員会をまとめる、いわば委員会会長の家柄。そしてミウラのヴァイツ家が戦人の長、マープルのミートン家が王家の倉を預かる家柄」

桃矢は、再び日本の歴史をひもといていた。大和朝廷の時代、家々によつて、ある程度担当する役職が決められていたような？

いつものように桃果に視線を向ける桃矢。くりっとした可愛い目を見開いてジエベルの説明を聞き入つていた。桃果も驚いているようだつた。

違う！ 彼女は、初めて聞くシステムとして驚いているのだ！ 桃矢は、桃果は歴史がからきし駄目だったのを思い出した。

「国民総所得の低いゼクトールでは働き出す年齢が低いため、法律では十三才で成年と見なされます。ついでに言いますと、わたくしの祖々母は、十四才で宰相に就任したという経歴の持ち主です」
「ま、まあ、国の事情だよね」

一つの謎は解けた。こりるはもう一つの謎。

後で聞きにくいこと。いまなら勢いで聞ける気がする。

「その辺は理解できましたが、……みなさん水着なのは何故？」
漆黒の水着を着ているジエベル。あきらかにサイズが一つ小さい。砲弾型に突き出したバストと相まって、勝手に視線が首下に移動するという男の性に、さつきから桃矢は苦しんでいるのだ。

それだけならまだしも、タイトミニースーツを着込んだミウラ以外、同年代の女の子が下半身水着姿である。何人かはハイレグだ。おまけにゼクター女性は、美人ぞろいでナイスバディ！

間違い起こしそうでとても怖い。それ以前に桃果の仕置きが怖い。

不可侵の領域へ足を踏み込んだ感の桃矢。いろんな意味で緊張している。

「桃矢、鼻と唇の間が長くなつてるわよ

桃矢が鼻に手を当てる。それを見て、またもや笑いを堪える桃果。

「これはゼクトールの風習です」
ジーベルの答えは簡潔だった。

「元々は宗教上の理由からですが、王が変わると、みな一斉に衣を替えるのです。制服のデザイン選択は、新しい王にまかされます。つまり王の好みでいろんなタイプの制服が生まれるのです。トーヤ様の代に変わった今、制服もトーヤ様の趣向に合わせて替えるのが習わしです」

「え！ ジャ、その水着は先王の趣味？」

「ここにこ笑いながら頷くジーベルの水着が黒光りしていて眩しい。「先々代は、上がセーラーで下がマイクロミニ」という制服を採用されていたそうです」

遠き過去に、勇者を見る桃矢。

「さて、トーヤ様におかれましては、どのようなデザインがお好みでしようか？ 全員の分を揃えるには時間がかかります。お話しでに、今ここでお伺いしたいのですが……」

ジーベルの言葉に、桃矢は唾を飲み込んだ。
「ど、どのようなモノでも？」

「これはアレだ。服という文化を手に入れた代わりに失った物を。

「王の命令は絶対です。死ねと言われれば、喜んでこの命、捧げましょう」

ミカラが直立不動の姿勢で宣誓する。後ろに控える家臣団の女子達も首肯してる。

「たとえば、……」この国、暑いしね。……自分の好みと「よりは、みんなの快適性を第一に考えてるんだけど……いやあ暑いよね？熱帯だし。……そこで提案なんだけど……」

「なんなりと」用命下さい！」

真剣に受けたミウラ。きりりとした眉がりりしい。

「それじゃ、上半身裸にな」

そこから先は、桃矢にネックブリー カーをかけられたので喋ることができなかつた。

「乳房を出すのは恥ずかしい事ですが、王の命令とあれば仕方ありません。制服代が安上がりで済むのが救いです」

平然とした面持ちで肩から水着をずらしだすミウラ。ジエベルやノア達も頬を朱に染めながら、次々と肩を出しあげた。

「ストップ！　ストップです！　命令です、王の訂正命令！　今はナシ！」

ネックブリー カーを解かれた桃矢。解かれた意を解し、必死で訂正の弁を振るう。

「今まで変更無し！　僕と先代国王は趣味が一緒みたいですね！」

泣きながら、しかし、ギリギリのラインだけは守り通した桃矢であつた。

5・最終防衛ライン（後書き）

次回、6話・記念写真

かみんぐすうーん！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0753z/>

悪役上等！ 武装戦闘国家ゼクトール

2011年12月5日20時50分発行